

2025年1月11日
審査委員長 中根逸朗

クレー射撃標的公式セット標準手順

はじめに

本書は、(公社)日本クレー射撃協会が本部主管大会で実際に採用している、ISSF(国際射撃連盟)規定に準拠した、クレー射撃標的公式セット(以下「セット」という)の標準手順を示したものである。

ただしこれら手順は本部公式役員向けに編集したものであり、各地方協会が主催する大会(地方公式等)においては、必ずしもこの手順を踏まなければならないというものではなく、あくまで参考資料として利用していただきたい。

1 トラップ／スキート共通項目

- 1.1 セット作業中における関係者(以下「セット要員」という)は、その業務中であることを示すためレフェリー／ジュリーベストを着用すること。
- 1.2 当該射面でセット要員を指示する責任者(以下「指示員」という)と、標的落下地点で飛距離計測をする者(以下「距離員」という)との間は距離があるのでトランシーバーを携行させる。トランシーバーが用意できない場合は手信号を用いて伝達すること。重要なのは大声を出してセット作業することは極力避けること。
- 1.3 距離員には安全性を考えて目立つ色の上着を着用させる(例えば狩猟者が身に着けるオレンジベストなど)。
- 1.4 作業中は常にクレー標的の飛ぶ行方に気を付けること。
- 1.5 放出機の面前には絶対に立たないこと。
- 1.6 必要であれば巻尺を用意する。

2 トラップセット

- 2.1 セット要員にあらかじめ(抽選により決められた)セット番号を指示員より通達しておく。

- 2.2 飛翔高度計測用ポールをトラップピット前淵から 10m 先に立て置き、角度計測用分度器をトラップピット上の 1 番グループのところに、及び ISSF 公式準拠セット表（以下「セット表」という）をそれぞれの担当者が用意（又は確認）する。
- 2.3 セット要員の配置は、トラップピット屋根上に指示員 1 名、分度器操作員（以下「分度器員」という）2 名、トラップピット前方 10m 位置に飛翔高度計測用ポール操作員 1 名（以下「高さ員」という）、標的落下地点に距離員 1 名、トラップピット内に放出機調整員 1～2 名（以下「調整員」という）を待機させる。
- 2.4 セット調整は 1 号機から順に開始すること（特殊な事情がない限り 5 番グループ側からは行わない）。
- 2.5 指示員は、1 番グループトラップピットの上から、セット表に記載された 1 号機セット高さを、高さ員及び調整員に大きな声で伝える。
- 2.6 調整員は放出機をその高さに調整し、放出掛け声と共に標的を 1 枚放出させる。
- 2.7 高さ員は標的放出方向左側の約 10m 離れたところに立ち、ポールを通過していく標的の高さを目盛り値を参考にして、調整員に高さの高低調整量を大きな声で伝える（例：「20 セン下！」）。
- 2.8 距離員は標的の落下地点と地面に記された目印との差から、飛距離の調整量をトランシーバーで指示員（又は調整員）に伝える（例：「3m 戻し！／2m プラス！」）。
- 2.9 調整員は高さや飛距離を再調整し、放出掛け声と共に標的を 1 枚放出させる。
- 2.10 以降高さや飛距離がセット規定内に入るよう 15 号機までこの作業を繰り返す。
- 2.11 15 号機の高さや飛距離設定が完了したら、指示員は距離員に終了したことを伝え、距離員は射台側に引き上げるか、隣接射面もセットするのであれば移動し待機する。また高さ員はポールを收拾する。
- 2.12 次に角度設定に入るので指示員は 1 番グループに戻る。
- 2.13 指示員は、セット表に記載された 1 号機の角度を分度器員及び調整員に大きな声で伝え、分度器員は分度器の 0 度をトラップピット上の 1 号機の印のところに合わせ、指針を指示角度にする。
- 2.14 同時に調整員は放出機の角度調整をし、調整終了後放出掛け声と共に標的を 1 枚放出させる。

- 2.15 指示員は分度器の指針後方から飛翔した標的を視認し、指針との角度のズレを見て、補正が必要ならば調整量を調整員に大きな声で伝える（例：「2度右！／ちょい左！」）。
このとき標的自体に傾きが生じていたら、同時に傾き修正も伝える（例：「右肩下げ！」）
- 2.16 角度が0度の場合、指示員は必ず射台に赴き、射台内から0度の飛翔具合を確認すること（分度器真後ろからの視認では正確な0度が出にくいいため）。
- 2.17 この作業を以降15号機まで続け、すべてが終了したら、セット表・分度器・ポール・トランシーバーを所定の位置に戻し完了となる。これらセット作業を慣れてきたら一射面30分以内で済ませること。

3 スキートセット

- 3.1 センターポールの所定位置に、サークル面に標的が通過する向きで計測リングを立てておく。
- 3.2 セット要員の配置は、4番射台と8番との中央付近（8番射台射撃時の審判立ち位置）に指示員1名、1番射台に方向確認員1名、プール標的落下位置に距離員1名、標的放出のためプーラー（若しくはスイッチ操作する者）を配置させ、放出機調整員をプールハウスに待機してもらう。
- 3.3 スキートセットは原則プール標的を基準とする。従って射場の構造によりプール標的が計測できない場合はマーク標的を基準とするので、本セット手順の内容をプール／マークを逆にして読み取ること。
- 3.4 プール標的を基準とするので、マーク標的飛翔方向の柵等が設置してあれば閉じておく（マークの飛距離は計測しない）。
- 3.5 指示員はプーラーにプール標的を数枚放出させ、指示員で高さを、距離員が飛距離を、方向確認員に左右の偏差を確認させ、その状況を指示員に告げる。
- 3.6 指示員は、飛距離を $68\text{m} \pm 1\text{m}$ 、高さをサークル上部側1／3以内、飛翔方向サークル中央になるよう、告げられた各状況から調整員に微調整の指示を出す。
- 3.7 調整員からの修正合図を基に再度プール標的を放出させ、それぞれサークル内の規定に収まるようこれらを繰り返す。
- 3.8 規定内に落ちていたらプール放出機は以降触れないので封印とする（基準とするので以降プールハウス内には立ち入らない）。

- 3.9 方向確認員を7番射台に、調整員をマークハウスへ、距離員を調整員との伝令役のためにマークハウス入り口に移動させる。
- 3.10 指示員はプラーにマーク標的を数枚放出させ、同じく高さ、左右偏差を確認させ、状況を指示員に告げる。
- 3.11 高さをサークル下部側1/3以内、飛翔方向をサークル中央になるよう、指示員は調整員に微調整の指示を出す。
- 3.12 調整員からの修正合図が出たら再度マーク標的を放出させ、それぞれサークル内の規定に収まるようこれらを繰り返す。
- 3.13 高さや偏差が決まったら、距離員は計測リングのサークル面を4番射台側に向くよう調整し、距離員はひとまずリングから少し離れた位置に居ること（標的がリングに衝突したとき修正するため）。
- 3.14 指示員はダブル標的を数回立て続けに放出させ、その時カメラでダブル標的の交差状態を撮影する（実際にはスマートフォンのハイスピード撮影機能アプリ等を使用している）。
- 3.15 指示員は撮影した映像から、プール／マークそれぞれの標的が規程範囲に入っているか確認し（図参照）、標的の交差がマーク側のサークル外に出ている場合は、調整員にマーク標的の速度を上げるよう指示をする。逆に交差がサークル中心線よりプール側に寄っている場合は、マーク標的の速度を下げるよう指示をする（ここでプール放出機には触れないことが重要）。
- 3.16 調整員からの修正合図が出たら再度ダブル標的を放出させ、撮影した映像から規定内に収まっているか確認する。
- 3.17 規定内に収まるまでこの調整を繰り返し、問題ない範囲内に落ち着いたらマーク放出機を封印する（以降マークハウス内には立ち入らない）。
- 3.18 セット作業が終了したら、計測リングとトランシーバーを所定の位置に戻し完了とする。これらセット作業を慣れてきたら一射面10分以内で済ませること。

備考（一般射場で日々の通常セット作業を行う場合は・・・）プール標的をリングの中央より上を通過するように68±1mで計測＞マーク標的をリングの中央より下を通過するようにする＞ダブル交差はセンター向かってやや右（マーク）側になるようマーク標的を調整しセット完了。

4 参考図

